

高速化とセキュリティ向上で新展開

無線LANは企業の基幹回線へ

スマートフォン／タブレット端末の導入を機に、無線LANの本格導入に踏み切る企業が増えてきた。技術の進歩で無線LANが企業の基幹回線としての役割を担えるようになったからだ。

文◎藤井宏治 (IT通信ジャーナリスト)

無線LANの法人市場がにわかに熱くなってきた。

「当社製品のグローバルベースでの出荷台数は四半期ベースで昨年の倍以上。市場全体も4割ほど伸びているのではないかな」——。こう話すのは、無線LANソリューションベンダーのアルバネットワークスの日本法人でマーケティングディレクターを務める杉江智之氏だ。

同じく無線LAN専門のメル・ネットワークス(日本法人)のシニアシステムエンジニア、中西良夫氏も「規模はさほど大きくないものが多いが、問い合わせや受注に結びつく案件

の数が1年前とは格段に違ってきている」という。

こうした無線LANの伸びを引っぱっているのが、スマートフォンやタブレット端末の企業導入である。なかには、PCに替わるツールとして、タブレット端末の全社導入に踏み切るケースも出て来た。

イーサネットポートを持たないスマートフォン／タブレット端末を社内システムに接続して業務に活用したいというニーズが、多くの企業が改めて無線LANの整備に動く大きな理由となっているのだ。

また、技術の進歩も企業の無線

LAN導入が進んできた大きな要因となっている。

これまで無線LANは、有線LANに比べて通信速度が遅く不安定、あるいはセキュリティ上の懸念があるなどの理由で、有線LANの補完的な役割にとどまってきた。

ところが、①数百bpsクラスの情報伝送能力を持つIEEE802.11n、②高度な暗号化が容易に利用できるWPA2、標準認証技術のIEEE802.1Xなどの普及によって、そうしたネックがほぼ解消されてきたのだ。

無線LANが主役の座に

これらの動きは、企業ネットワークにおける無線LANのプライオリティを大幅に高める結果をもたらしている。

ネットワーク機器大手のシスコシステムズでは「プライマリーライン(基幹回線)として無線LANを使う動きが間違いなく広がってきている」(シスコシステムズ アーキテクチャー&テクノロジー事業セキュリティ&ワイヤレス営業部シニアセールススペシャリスト若澤一善氏)として、ユーザーの新たなニーズに対応できる製品ラインナップの整備に力を入れ出している。若澤氏は「企業は多額の内部留保の有効投資先を探している。無線LANがその受け皿になり得る」と、展開に意欲を見せる。

この動きはさらに大きな変化の引

図表1 エンタープライズのオール無線化

